

平成 22 年度 海外研修派遣 報告書

東北大学病院 佐藤和宏

1. 研修に求めたものとその結果

自分が今回の研修に求めていたことは、アメリカの名門大学の研究施設が、どれほどまでに充実しているかを自分の目で見ることであった。研究施設の充実ぶりは、情報を得ているつもりだった。しかし、それは耳学問である。自分の目で見て、自分の尺度で研究施設の充実度を評価したいということを、今回の研修に求めていたのである。案の定、その充実ぶりは筆舌に尽くしがたいものであった。その中でも印象深かったのは、スタッフの多さ、整った設備、そして産学の連携がとれていることであった。残念ながら、アメリカの施設より、日本の施設の方が良いと思われる部分を見ることは出来なかった。しかし、アメリカの施設の充実ぶりを自分の尺度で感じたことは自分にとっての成果であった。

2. 日本と米国との医療に関する違いについて

日本とアメリカの医療を簡単に言うと、収入に見合った医療を受けるのがアメリカ、収入によらず、同じ医療を受けられるのが日本である。日本人的感覚からすると、アメリカの医療制度に不公平を感じる。しかし、背景や事情を聞いてみると、アメリカの医療制度もまた合理的なのかもしれない。収入に見合った医療というのは、社会に大きく貢献した人ほど多くの収入が得られ、そして手厚い医療が受けられるという解釈もできる。このような医療制度こそが公平かもしれない。ところで、日本とアメリカの医療制度の是非は別として、医療制度が異なっても、医療費抑制などいくつかの問題は共通しているようである。医療制度の違いによらず、同じ問題が起こりうるということに、医療制度の難しさを感じた。

3. 最も印象に残ったこと

最も印象に残ったのは、日本で言うところの専門技師制度である。アメリカでは、技師の資格の他に、CT や MR など一つのモダリティに特化した資格があるとのことだった。しかし、日本とは状況が異なり、資格を取得し、CT や MR などのモダリティ専属で勤務する。一方、日本では専門技師であっても、複数のモダリティの仕事に従事することが多い。そのため、アメリカの技師は仕事に対する意識、仕事に対する真剣さが日本の技師とは異なるのではないかということを感じた。同じ技師として、見習わなければならないことが多いと思われた。

4. 研修で得たものを今後にどう生かすか

現地で感じた仕事に対する意識、仕事に向かう意欲の違いは、見習わなければならないと思う。そして、出来るだけ多くの方々にその違いを伝えることを試みたい。その結果、放射線検査の質がより向上すれば幸いである。

5. 謝辞

研修を企画していただきました、日本放射線技術学会関係者の皆様、研修のサポートをしていただきました GE ヘルスケアジャパンのスタッフの皆様に御礼申し上げます。研修の参加を許可していただききました、東北大学病院診療技術部放射線部門梁川技師長を始め放射線部門職員諸兄に感謝致します。



こども病院の外観